

## 巻頭言 人事利権

和歌山県の、南紀地方の話である。ある教員志望の青年が、何年も採用試験を受け続けていたが合格しない。意欲もあり優秀な人で、高校の同級生たちは、ああいうやつこそ教員に向いているのに、と残念がっていた。この人には学校の校長の娘の幼なじみがいたが、こちらは1年目ですんなり合格し、美術の教員に採用された。しかし美術の素養のある人ではなく、大学も芸術系ではなかった。一方、同時に受けた芸術系大学卒の受験者は不合格になっている。落ち続ける青年を見かねた父親が、いろいろ情報を集め、あるとき息子に言った。「小学校教員の口があるそうだ。300万らしい。それくらいだったらお父さんが出してやるが、お前どうする。」しかし、断ったのだそうだ。お父さん、そんなことをしたら、ぼくは生徒に顔向けできなくなる、と言ったという。結局青年は教員をあきらめ、しかし子供に接する職業につきたいという気持ちが強かったので、自分で塾を開いた。熱心で子供や親の信頼が厚く、生徒もよく集まっている。そうってから、この人は幼なじみの女性教員を呼び、かねて疑問に思っていたことを問いただした。「なあ、〇〇ちゃん、君は芸術の専門でもないのにすんなり美術の教員に採用されて、いっしょに受けた芸大出が落ちたりしてる。これはどういうことなんや」。旧知の相手であってみれば、人柄はよくわかっている。毎年受験しながら落ち続けていることも、そしてその本当の理由も…。問いかけに、言い抜けはいくらもできたらうが、正直な人だったのだろう。女性はうつむいたまま答えず、やがて机の上にポタポタと涙を落とした。その涙が、すべてを語っていた。そして黙って去り、二度とやってこなかったという。

大分県教育委員会の、教員採用をめぐる贈収賄が明るみに出たあと、全国の教育委員会同様、和歌山県教委も形ばかりの調査を行い、「今年度については不正は確認できなかった。過去については調査の予定はない。今後とも、客観性が保てるように努める」旨のコメントを出した。確認できなかったというのは便利なお役所ことばで、確認する気がなければ「確認できない」わけである。事前の結果通報があったくらいは認めたようだが、実態はそんななまやさしいものではない。もっとも、まともに調べたらどういうことになるか。教育現場が大混乱になることは目に見えている。このようなことは全国に蔓延している。私自身、かつて神奈川県教員採用試験を受けた際、県会議員に口利きを頼むルートがあると聞いたことがある。

大分県で、不正のあおりを受けて不合格になった受験生は単年度で二十数名というから、全国では毎年数百人程度、教員になるべき人がその道を絶たれてきたと考えておかしくない。金でポストを買うようなことをしたら生徒に顔向けできないと断るような人こそ教員になるべきを、わざわざ選んで排除している。生徒こそいい迷惑である。教科指導の面でも、なぜこんな人が教員を、とあきれるような例が実際にあるし、そういう教員に習った生徒の多くが、その教科をきらいになっている。不公正による教育の劣化は無視できない。

なぜこういうことが起こるのかといえば、それは身分、賃金の保証されたポストが利権

の対象になっているからである。このことは教員にとどまらない。たとえば自然公園のレンジャーやガイド、スポーツクラブのコーチ、福祉関係のNPO、何でもよい。仕事をボランティアに依存していたとする。しかしそれでは個人の負担が大きく、活動も制限される。そこで自治体などが予算措置をして、それらの人々が安心して十分に活動できるよう、ポストが設けられる。しかしその瞬間から、歪みが始まる。活動に対する意欲も能力も低く、ただ賃金と安定した地位目当てにもぐりこもうとする人々が集まり、人事を握る部門に金が行き交い、利権の構造ができ上がる。人事部門の退職者も自ら「管理者」として天下る。それらの職員は、創意工夫もあらばこそ、面倒なことをいやがり、楽をして金を取ることだけ考えるようになる。つまり、組織は腐るのである。ある虐待事件で児童相談所が子供の命を守れなかったのは、教育委員会から天下った所長にやる気がなく、対応が後手に回ったからだと批判されたこともあった。人の命にかかわることでさえこの有様である。

大学や研究機関はまだましなほうだろうが、それでもこうした傾向は皆無ではない。まともに研究もできない教官が、学会発表も学術誌への論文掲載もないまま、高齢になるまで助手や助教の地位にとどまる。そのようなポストは若手にとって、研究者として生き残るための通過点である。その狭い通路を、障壁となっていていつまでもふさいでいる。研究機関の場合に問題なのは、専門化が進んで構成員の能力を評価できる人間が限られ、しかもそれらの人々は同僚であったり、人間関係がからんで、ストレートにものが言えなくなっていることである。加えて公務員の地位は保証されており、何か言ってどうなるものでもない。それでも批判すると、「かわいそうだ、冷たい」と、人情がらみで逆ねじを食わされることもあると聞いている。しかし就職できずに研究をやめて行く若手研究者は、「かわいそう」ではないのだろうか。これもまた、一種の税金の無駄遣い。大学の教育研究職は、無能教官に家を建てさせるためにあるのではない。

国は人が作る。人材登用の適正、不適正が国の命運をも左右することは、世界の歴史が語っている。人口減少が進む中、ただでさえ少ない人材をこのようなやり方で殺している。惜しむべし、この国は、人事利権によって亡びるか。

< S >